

令和7年度第1回 岡山県自殺対策連絡協議会 議事概要

- 1 日時 令和7年7月11日（金） 14：30～16：00
- 2 会場 ピュアリティまきび（3階橘）
- 3 出席者 〈岡山県自殺対策連絡協議会委員（代理者含む）〉17名
〈事務局〉保健医療部健康推進課、県精神保健福祉センター
- 4 議題 (1) 第3次岡山県自殺対策基本計画（R3.3策定）に係る取組状況
(2) 令和7年度自殺予防対策関連事業
(3) 第4次岡山県自殺対策基本計画（仮称）の策定について
(4) 第3次岡山県自殺対策基本計画（R3.3策定）に係る概要
(5) 第4次岡山県自殺対策基本計画（仮称）骨子案

5 発言要旨（議事概要）

議題（1）第3次岡山県自殺対策基本計画（R3.3策定）に係る取組状況

資料1-1・1-2により事務局より説明

〈質疑・意見なし〉

議題（2）令和7年度自殺予防対策関連事業

資料2-1・2-2により事務局より説明

委員 20ページのストレスチェックの実施に関して、「50人未満事業場は周知」となっているが、労働者数50人未満の事業場でもストレスチェックの実施は義務に変わったのではないか。

委員 一定期間の周知期間をおいて施行という段階にある。

委員 26～27ページに記載されている事業（複雑困難な状況にある子ども・若者対応アウトリーチチーム）は、これまでに何件程度の事例に対応したのか。

事務局 昨年度は、5件の事例に対応した実績があり、各学校に出向いて学校の先生や保健所、市町村の保健師とも連携して支援を行った。

議題（3）第4次岡山県自殺対策基本計画（仮称）の策定について

資料3により事務局より説明

〈質疑・意見なし〉

議題（4）第3次岡山県自殺対策基本計画（R3.3策定）に係る概要

資料4-1、4-2により事務局より説明

〈質疑・意見なし〉

議題（5）第4次岡山県自殺対策基本計画（仮称）骨子案

資料5-1、5-2、5-3により事務局より説明

委員 47～48ページ「10 新型コロナウイルス感染症拡大下での自殺の概況」について、自殺者が増加した要因は、罹患者の生活苦によるものか、もしくは飲食業などの経済的な問題によるものなのか。

委員	<p>コロナ禍での自殺者増加で最もよく言われている考察の一つとして、コミュニケーション不足や社会活動の停止が、自殺の要因となりうる「孤独」に大きく影響したという見方がある。</p> <p>コロナ禍では特に女性の自殺が増加しており、その背景には、普段のコミュニケーションや社会活動の機会が男性よりも多かった女性にとって、それらが大きく制約されたことによる影響が考えられる。</p>
委員	<p>福井県の自殺率が一番低い状態である（38ページ）ことについて、コロナが災害と見なせる状況下で、何か考察しているか。</p>
委員	<p>一つの説として、福井は家族が多く単身が少ないとされる点が考えられる。</p>
委員長	<p>鳥取県では、地域の人々の顔が見える関係性や活発な保健活動が（自殺率が低いこと）関係している可能性があるという話を聞いている。鳥取県の措置通報が全国一低いことも関係しているのではないかと聞いている。</p> <p>コロナ禍では50代70代の女性の増加が顕著だ。その背景には、介護の負担や非正規雇用の女性が非常に苦境に陥ったのではないかと、この協議会でも考察されていた。</p>
意見交換	
委員長	<p>計画についてのご意見、今回の資料からの考察、これまでの経験からで何かご意見があるか。</p>
委員	<p>コロナ禍によって地域社会の人とのつながりが希薄になっている。災害によって地域全体が一つになり、命の尊さを学ぶことはあるのではないか。</p>
委員長	<p>地域のとつながりの大事さというあたりについて、岡山の事情に詳しい委員の意見を伺いたい。</p>
委員	<p>近年、若者の自殺者数はそれほど大きく増加していない一方で、50代の働き盛りの男性の自殺者数が高止まり、あるいは減らない状況にある。若者や女性への対策だけでなく働き盛りの人が相談しやすい環境を考えていかなければ、全体の生き方そのものが不安定になってくる。生きがいを大切にする必要性があると考えている。</p> <p>50代や60代の層が、いかに様々な場でコミュニケーションを持つかが重要である。人と人とのつながりをいかに大切にしていけるかを基本として考えなければ、自殺者数は減らない。</p> <p>老人会や地域のサークル活動など、人とのつながりを活発にし、携帯電話やパソコンばかり見てコミュニケーションが不足している現状の改善につなげていくべきだと思う。</p>
委員長	<p>そのあたりについては計画にきちんと盛り込むべきだということか。</p>
委員	<p>岡山県で自殺者数が減少傾向にあるのは、愛育委員による高齢者への個別訪問など、人とのつながりを求める地道な活動が大きく寄与している。このつながりを伸ばしていくような地域活動が基本的に大事だと思っている。</p>
委員	<p>愛育委員は岡山県全域におり、地域住民とのつながりが非常に深い。個人情報保護も重要であるかもしれないが、そういったつながりを大切にすべきだと考え、愛育委員の活動の基本として声かけを一番に行うよう伝えている。</p>

委員

高齢者、特に女性は既に多くのつながりを持っているが、男性は地域での集まりになかなか出席しないため、そうしたつながりをどのように求め、形成していくかが課題である。

子どもや中高生はゲームに過度に集中し、コミュニケーションが不得手になってきている。ゲームでは自分が不利になるとスイッチを押せばそれで済んでしまうため、かつての将棋や囲碁のように、話し合いや敗北から生まれるコミュニケーションの機会が現代の若者から失われている。

保護者についても、かつてはPTA活動への参加が事実上義務付けられていたが現在は任意化しており、活動へ参加していない保護者や子どもはこれからの不安要素があるのではないか。

委員長

先ほど委員から中高年の問題が意見に挙がったが、何か他にご意見があるか。

委員

内閣府が推進する「孤独・孤立官民連携プラットフォーム」の一環として、孤独・孤立相談ダイヤルをやっている。無料ダイヤルで、相談者が電話をかけると相談内容に応じて、電話、チャット、メールといった複数の手段で相談を受け付け、社会福祉協議会、女性相談、子ども相談など地域の支援機関につながり仕組みになっている。委員の皆さんの団体や県・市町村の行政団体もプラットフォームに協力できるが、岡山は参加団体が少ない。このプラットフォームの存在や関わり方について、関係者間で情報が十分に伝わっていないのではないか。「孤独・孤立官民連携プラットフォーム」は人と人とのつながりを築くために役立つと思うので、このような新しい動きを広く知っていただきたい。

委員長

新しい動きについて説明いただき感謝する。それ以外で他にご意見があるか。

委員

働き盛りの男性の自殺が非常に多く、女性と比較して衝動性が高い傾向にある。男性の自殺は未遂が少なく、いきなり既遂に至ることが多い点が大きな問題であり、周囲が気づきにくく予防が非常に難しい。

この背景には、アルコール問題が男性に非常に多いこと（アルコール依存により自殺するのではなく酩酊状態で既遂に至る）や、男性が弱音を吐けないという価値観を持ち、コミュニケーションが上手くできないといった問題がある。自殺予防のためには、周りから積極的に接近しなければ救うことが難しい。ゲートキーパーがいかに網を張って本人を救い出すかが重要。

自殺既遂者の多くが身体疾患でかかりつけ医を受診していることから、かかりつけ医が異常を察知し、精神科への紹介や家族・会社との情報共有ができるような教育が重要ではないか。

男性と女性では自殺対策の方策を変える必要がある。男性については特にアルコール問題が非常に大きく、県中部や県北部の地域ではアルコール関連問題が元々高い傾向にあるため、これらも踏まえた対策が必要である。女性については、男性よりうつ病の割合や未遂者が多く見られるものの、比較的コミュニケーションを取りやすく、弱音を吐きやすい傾向にあるため、ゲートキーパーを含めた支援で救い出せる可能性が高い。

委員長

残り時間も少なくなってきたので、警察の方から情報提供やご意見があれば発言いただきたい。

委員

警察は、自殺現場に最初に臨場し事件性の有無を確認する業務を行っている。その中で、自殺と特定したものについて必要な聞き取りを行い、自殺統計データを警察庁を通じて厚生労働省に提出している。

令和7年度の岡山県における自殺者数は昨年比べて大きく減少傾向にある。子供の自殺もある程度少ない推移となっているが、依然予断を許さない状況にあらうかと思う。

委員長

若者の話が挙がっていたので、県の教育庁のご意見も伺いたい。

委員

全国的に子どもの自殺者数が増加傾向にあり、教育委員会としても強い危機感を持って対応している。この背景には、委員からの指摘にもあったようにコミュニケーションの問題があると考えている。

教育の世界では、小学校低学年での暴力行為の増加が顕著であり、これはコロナ禍を含めたコミュニケーション不足や人との関わり方の経験不足が影響していると分析している。

コミュニケーション能力を高めるために、教育プログラムを学校独自で展開したり、子ども同士の関わり合いを増やすような授業に取り組んでいる。

自殺予防の観点からは、「SOSの出し方に関する教育」を多くの学校で実施している。子どもたちがSOSを出す方法を教えるだけでなく、それを受け止める教員の感度も非常に重要であるため、教員研修も合わせて実施し、総合的な自殺対策を推進している。

委員長

最後に弁護士会のご意見も伺いたい。

委員

岡山県民には、「人前で相談することや弱音を吐くことは、ふうが悪い（体裁が悪い）」という閉鎖的な土地柄がある。特に高齢者においてこの傾向が顕著で、困りごとがあっても「相談したがない」だけでなく、「そもそも相談できる場所を調べようとすらせず、探すこともしない」といった状況にある。高齢者のSOSのサインをどう拾い上げるかが課題である。

幼い子どもは自分でSOSを出すことが非常に難しい。いじめ問題なども、子ども自身が相談するのではなく、親が気づいて相談に来るケースが多い。

高校生や大学生といった若年層についても、やはり「相談するのは体裁が悪い」という感覚があり、なかなか自ら相談に訪れない傾向にある。この世代においても「SOSをどう拾い上げるか」が依然として大きな課題である。

6 閉会